

第11回月刊JPCOAR「オープンアクセス新任担当者相談会」実務紹介(2)

機関リポジトリの実務

2022年 JPCOAR イベント運営作業部会

本講の内容

- ①本文データについて
- ②アイテムの修正と削除
- ③統計の取得と管理
 - (1) アイテム毎の登録件数
 - (2) アクセスログの確認
- ④運用マニュアルについて

- 本文データのファイル形式は、一般的にはPDFが使用されている
(博士論文は、PDF/Aが推奨)
- 紙の資料をスキャンしてPDFにすると容量が重くなるので注意！
- PDFには「透明テキスト」を付けると、全文を検索できるだけでなく、データマイニングの対象となりやすくなる

【紙資料からPDFを作成する際の参考資料】

森下 映理「紙資料からPDFを作成する」機関リポジトリ推進委員会, 2015.2

<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/records/542>

★人やシステムが利用しやすいかどうかと、長期的な保存に適しているかどうかを考慮すること。

※PDF以外でも、電子ファイルであればどんな形式でも登録可能

- 修正・削除を行うと、そのアイテムは次回のハーベスト（リポジトリが連携しているシステムによる定期的なデータ収集）対象となる
- 「削除」は、必ず各システムで定められた手順で行うこと
（JAIRO Cloudなら「削除」、DSpaceなら「取り下げ」）
- アイテムを「非公開」とした場合も、サービスプロバイダは「削除」としてハーベストする
- JaLCDOIを付与したアイテムは、一度削除（DOIを取り下げ）すると、同じDOIで再度公開することはできない

★ハーベストのスケジュールを確認し、ハーベスト後に変更が反映されているかを確認する。

本文データの修正

- 修正日や修正箇所を明記し、履歴が分かるようにする
→履歴記載ができないシステムの場合は、description（内容記述）に履歴を記載することもできる。
- バージョン管理を行う場合は、あえて古いアイテムを残して新しいアイテムを作成し、相互にリンクを作成してもよい
→査読プロセスを明確に残したい／プレプリントと出版稿とを比較しやすくしたい／別々に構築したデータベースを統合的に運用して情報提供したい、などの場合
- リポジトリシステムによっては、本文データを差し替えると、ダウンロード件数などのログも削除されることがある
→『JAIRO Cloud』では、差し替えの機能を使うと、ログを残すことができる

(1) アイテム毎の登録件数

- 登録したアイテムは、資料種別ごとに集計する
- 大学の場合、文部科学省の学術情報基盤実態調査や日本図書館協会の日本の図書館統計などの統計調査で、年度ごとのダウンロード数や登録メタデータ数などを報告する機会がある
- IRDBは、各機関のIDでログインすると、「コンテンツ統計（ユーザ）」から、自機関の統計を確認できる

★機関リポジトリで集計したアイテム数とIRDBに登録されたアイテム数が異なっている場合、正しくハーベストされていない可能性がある

(2) アクセスログの確認

- ダウンロード件数などのアクセスログは、機関リポジトリのインパクトを計る指標となるので、月ごとに集計しておくといよい
- 年度ごとのダウンロード数は、学術情報基盤実態調査の調査項目にもなっている
- アイテムごとに集計ができる場合は、登録者に報告して、研究者のモチベーションの向上につなげることも考えられる
 - ※ただし、ダウンロード数で計ることができるのは、その研究成果に対するインパクトであり、研究成果そのものの価値ではありません。
- 前月と比較して異常な値となっている場合は、不正アクセスも疑われる
 - 不正アクセスへの対応は、システム管理者に相談する

運用マニュアルは、システム操作よりも、各機関独自の事項について、分かりやすく、かつ安全に保管しておくために作成する

<運用マニュアルに残しておくこと>

- ☐ 運用方針について
- ☐ 経緯（設置年月日、主な仕様変更など）
- ☐ ID/PWの管理
- ☐ 連携先の管理（いつ連携したか、ハーベストのタイミング、ID/PWなど）
- ☐ メタデータの仕様
- ☐ マッピングの仕様
- ☐ 統計の取得方法

これで本講は終わります。